

第2章 銃後

子どもたちの生活①

疎開をくりかえした子どもたちのころ

藤澤 昭さんのお話から

○手榴弾 手で投げる小型の爆弾。

○配給制度 米や味噌、砂糖等の食べ物などの物資を、生活の必要に応じ、平等に割り当てて配る制度。

○太平洋戦争 日本政府は、アメリカ・イギリスとの開戦後、それ以前から継続中だった日中戦争を含めて「大東亜戦争」と呼んだ。アメリカ側は、対日戦争を「太平洋戦争」と呼び、戦後日本でもこの呼び名が定着した。

○召集 人を軍に呼び集めること。

私は、昭和七年（一九三二年）四月二十九日に、東京の四谷で生まれました。小さいころは、世の中全体が質素でした。学校では休憩時間に軍歌を歌ったり、手榴弾投げの模擬訓練のようなものをしたりしていました。習字では、当時の世相を反映して、「貫徹聖戦」などといったものを書いていました。

東京では、昭和十六年（一九四一年）四月にはお米の配給制度が始まり、十二月の太平洋戦争の開戦とともに、白いご飯がだんだん少なくなってきました。そのころは、お腹いっぱいになるということはありませんでした。当時で一日三合、一食一合だったので、それに何かをいれてのばしていったのではないかと思えます。それが、二合七勺になり、二合一勺となり、だんだんと少なくなっていくわけでした。

米を手に入れるため、買い出しに行ったのが千葉県です。それで、農家から食料を分けてもらい、買って持ってきました。しかし、取りしまりの警官に見つかり、取り上げられてしまうのです。

戦争が始まると、お米が少なくなり、代わりにイモやカボチャ、豆をしぼったあとの豆カスなどを食べるようになりました。

父は昭和十六年に召集されて、横須賀海兵団に入団しました。入団後は減多に面会することもできず、寂しい思いをしました。

昭和十八年（一九四三年）、父からハガキが届きましたが、どこにいるかは分かりませんで

○孝養 孝行して親を養うこと。

○疎開 子供や病人、お年寄りなど戦争の被害を受けやすい人を都市からより安全な地方に移り住まわすこと。

○軍需工場 軍隊が必要とするものを作る工場。主に武器やその材料などを生産する。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

した。当時十一歳の長男の私あてに送られた手紙には、「お前は男だ、日本男児だ。父は必ずお前の成人するのを遠い戦地で見守り激励している。母親はお前を一人前に育てるのにどれほど苦心しているかわからないのだ。必ず孝養を忘れるな。」と書かれていました。

戦争がだんだん激しくなると、十一歳（昭和十九年）の一月に、強制疎開させられました。強制疎開は急です。畑の真ん中に倉庫を改造した家をやっと見つけて、そこに疎開して、そこからしばらくは一時間半ぐらいかけて学校に通っていました。そうしたら、今度は学校自体が疎開で移転することになり、転校しなければなくなると、半年ほど石神井の関町西小学校に行きました。

この時には、すぐそばに軍需工場があったので、疎開先で爆撃を受けました。それから、昭和二十年（一九四五年）三月十日の東京大空襲に至っています。だから、東京の方にいたらどうなっていたか分かりません。

六年生の頃の昭和十九年（一九四四年）十一月には石神井でも爆撃が激しく、ほとんど毎日防空壕に隠れるようになっていました。

そのころ母が、「息子よ」ということで書い



さつまいもの配給

イメージ図

た詩が残っています。

「母と子が 懸命けんめいに作りし 防空壕ぼうくうごう いのち守りぬ 不手際ふてぎわながら」

「露つゆの臺とう 摘つみきし 吾子あこは 幼おきなくて 共にともに飢うえたる終戦しゅうせんの頃ころ」

「母と子が 身を寄よせ合あいて 戦いくさきつつ 防空壕ぼうくうごうで 眠ねむりたる日々」

「遠とほくより 身に近ちかくなる 爆弾ばくだんの じよじよに

激はげしく 防空壕ぼうくうごうゆるる」

「防空壕ぼうくうごうの土つちくれ落おつる地ぢひびきに 何なにくそ死しん

でたまるものかと」

○縁故疎開えんこそかい 親戚しんせきなどの
ところろに疎開そかいすること。

昭和十九年十二月には、家族全員で信州、今の長野県伊那市の藤澤村の親戚のところへ縁故疎開しました。信州の冬はとても寒く、カラマツの枝の枯れたものを集めていろいろで暖をとっていました。ひと冬分をみんな私が集めました。学校から帰ってから、何十回となく集めたものでした。お風呂は減多めったに入いれなくて、シラミだらけになりました。私だけではなくて疎開者そかいしゃはみんなそうでした。

昭和二十年一月、役場の人やくばのひとが家にやってきて、



イメージ図

防空壕

○ゲートル 厚地の木綿・麻・ラシャ・革製で、すねを包む服装品。外側を紐で編み上げる物と巻きつける物がある。

父が戦死したということを告げていきました。それを聞いた母は奥の部屋にこもり、私は歯をくいしばり、声をこらして泣きました。その時「自分がしっかりしなければならぬ。」と改めて思いました。それ以来、どんな時にも泣いたことはなかったのですが、大人になって、父が戦死したタラワを訪れたときは前が見えなくなるくらい涙があふれて止まりませんでした。戦後になって新聞を見て、役場の人が言いに来た時よりも一年以上前に、太平洋のギルバート諸島で父が戦死していたことが分かりました。

昭和二十年七月になると、アメリカの飛行機が空からキラキラ光るような紙でビラをばらまくようになりました。ビラには、「戦争はもう無駄だからやめなさい。」というようなことが書かれていました。先生はそのビラを「拾っちゃダメだ、見てもいかん。」と言っていました。したが、私は、一枚だけゲートルの間にいれて持って帰ったことがありました。

ほとんどの人が戦争を知らない世代、戦争があったことも知らない世代になっています。戦争を知らない世代の人でも、国土は守っていかねければなりません。最近、国なんかどうなってもいい、自分たちが幸せなら、という風潮になってきていると感じますが、私はそういうものではないと思っています。出征した軍人さんは、家族のことも、国家の事も考えて苦しみました。そのような歴史をしっかりと学んで、進む道を決めていくことが大切なのではないでしょうか。

DATA

平成22年度南区平和事業

聴き取り

- ・平成23年2月17日
- ・藤澤氏ご自宅



藤澤 昭(ふじさわ・あきら)さん

- ・昭和7年(1932年)生まれ
- ・札幌市南区在住

疎開をくりかえした子どものころ